

# 地球のなかまたち

part II

## ロフとハンナ



photo by toyosa



シロクマのロブに春がやってきました。

いままでひとりだったロブの家に、ハンナがやってきたのです。

そうなんです。

ロブは結婚したのです。

お相手はハンナ。幼馴染です。

ここはロブにとっては自分の家ですが、ハンナにとっては初めて住む家です。

少しホームシックになってしまいました。

ロブは心配でたまりません。

「ハンナ 元気を出して一緒に遊ぼうよ」

ロブはハンナのご機嫌をとるのに一生懸命です。



「ロブ、ごめんなさいね。 ちょっとホームシックになっただけ」

ハンナはロブに言いました。

「少しプールで遊びたいけど、ここは初めてだから怖いの」

「大丈夫！ ぼくがいるんだから」

ロブは大ハリキリです。

「さあ、一緒に行こう」

ロブはハンナに元気になってもらいたいのです。



「この階段は気をつけて」とか、

「こっちの方が歩きやすいよ」とか、

ロブはあれこれと世話を焼きます。

ハンナは嬉しい反面、少し鬱陶しく思い始めました。

「大丈夫よ、ロブ。私も大人だから……」

ハンナは遠慮がちに言います。

ロブはそんなハンナの言葉にはお構いなく、あれこれと注意をします。

エスコートをしているつもりです。



プールへ行くには、周りにめぐらされた塀の上を伝っていきます。

ロブはハンナの後ろから歩きます。

ハンナが落ちないように気をつけているつもりです。

ハンナは少しうんざりです。

「ロブは小さい頃からおせっかいな所があったわ」と心の中で思いました。

ハンナもロブが大好きですが 子供のように世話を焼かれるのでは閉口してしまいます。



「さあ 飛び込んでごらんよ 怖くないよ」

ロブはあくまで優しく言います。

ハンナは勢い良くプールに飛び込みました。

続いてロブも飛び込みます。

水は冷たくて気持ちよく泳げます。

二人はしばらく無言で水に浸っていました。

ロブはハンナがこのプールを気に入ってくれたかどうか、心配でたまりません。



「ハンナ、ここのプールはどう？ 気に入った？」

「ええ。もちろんよ。とても気持ちがいいわ」

「よかった。少しは元気がでたかなあ」

ロブはハンナのホームシックを心配していたのです。

ハンナは、ロブをおせっかいと思ったことを後悔しました。

「優しいロブ。大好きよ」とハンナは答えました。

ロブはすっかり照れてしまいました。



ロブとハンナはプールで遊び始めました。

「面白い泳ぎ方があるんだよ」

ロブはハンナに背泳ぎを教えようと思いました。

ボールをお腹に抱いて背中で水の上にゆったりと浮かぶのが、ロブは大好きです。

ハンナにもその面白さを知ってもらいたかったのです。

「そうそう。そうやって上を向いて……」

ロブは熱心に教えます。





熱意のあまり ロブはハンナの首をきつく絞めてしまったようです。

「く、くるしい～～」

ハンナは声を出すのも苦しそうです。

ロブは気がつきません。

ハンナは足をじたばたさせました。

「はなして、ロブ！ はなして！」

ロブはやっと気がつきました

夢中になりすぎていたのです

「ごめん。ハンナ。ごめん」 ロブは平謝りです。



ロブは慌ててハンナを抱きしめました。

「大丈夫かい？ ハンナ」

大事なハンナに苦しい思いをさせてしまったので、ロブはどうしていいかわかりません。

ひたすらハンナを抱きしめました。

一生懸命抱きしめたので、ロブの腕がハンナの首をまたまた絞めてしまいました。

これでは逆効果です。



ハンナはとうとう怒り出しました。

「いいかげんにしてよ！」

と、ロブの首に噛み付きました。

「ギャー」 痛さのあまりロブが叫びました。

ハンナは頭にきていたので手加減しなかったのです。

ロブは意気消沈してしまいました。

もう、どうしていいかわかりません。

痛さと申し訳なさで身の置き所がないのです。



しょんぼりしたロブをみて、ハンナは可哀想になりました。

体をブルッと震わせて、水を弾くとロブに言いました。

「痛かった？ ごめんなさいね。あんまり苦しかったものだから……」

「ぼくこそごめん。夢中になりすぎて、つい手に力が入ってしまったんだ」

ロブはハンナが機嫌を直したので、ほっとしました。



「ねえ、ロブ」ハンナは優しく言います。

「私だってシロクマなのだから、泳ぎはちゃんとできるのよ。そんなに心配しなくても大丈夫」

「そうだね。心配しすぎるのはやめるよ」

ハンナは頷きました。

でも「ほんとかしら、今後が思いやられるかも……」と思ったのです。

そしてホームシックのことなどすっかり忘れてしまいました。

二人はとても仲良しです。

いつかジュニアが誕生するかもしれません。



おわり